



岸本周平
Kishimoto Syuhei
中央大学客員教授

不機嫌なサラリーマン集団が 何とも羨ましい存在に見えたとき

2005年8月8日の衆議院解散を受けて、私は、急遽ふるさとの和歌山第1区での出馬を決意しました。財務省や内閣府で政府の側から「構造改革」を進めてきましたが、表向き、お化粧品は上手でも、その実、抜本的な改革が先送りされてきたことに憤りを覚えたからです。特に、自己保身と組織防衛に汲々とする官僚機構と、その同盟軍であるいわゆる「族議員」の抵抗はすさまじいものがありました。私たちの大切な年金保険料を食い物にしていた「社会保険庁」が結局、看板の架け替えだけで無傷で残ったことを見ても分かります。2006年度予算編成でも鳴り物入りの「特別会計改革」は霞ヶ関の抵抗で全く骨抜きの結果となりました。

一度は政権交代をして、しがらみやタブーを度外視した構造改革を進めなければ、少子高齢化の下で、国と地方を合わせて約1,000兆円近い債務を抱えたこの国の将来はない！と後先も考えずに、ふるさに戻り、同級生を中心とする素人の選挙を戦ったのです。結果は一敗地にまみれ、現在、無職浪人の境遇で、捲土重来を期しています。

財務省やトヨタ自動車(株)という大きな組織で勤め人をしてきた人間が、文字通り嵐のような「選挙」を経験し、今、落選中の議員候補者として、地方の都市でドブ板政治活動をしています。そうすると、同じ景色でも全く違って見えるんだなということに気がつきます。

私は、毎週月曜日の朝、私鉄の和歌山市駅とJR西日本の和歌山駅で街頭演説をしています。生活のリズムをつかむためにも、1週間のスタートを朝の街頭演説で始めます。気ぜわしい朝の通勤の時間帯ですから、サラリーマンの皆さんもそそくさと早足で通り過ぎます。落選中の候補者の演説を立ち止まって聞いてくだ

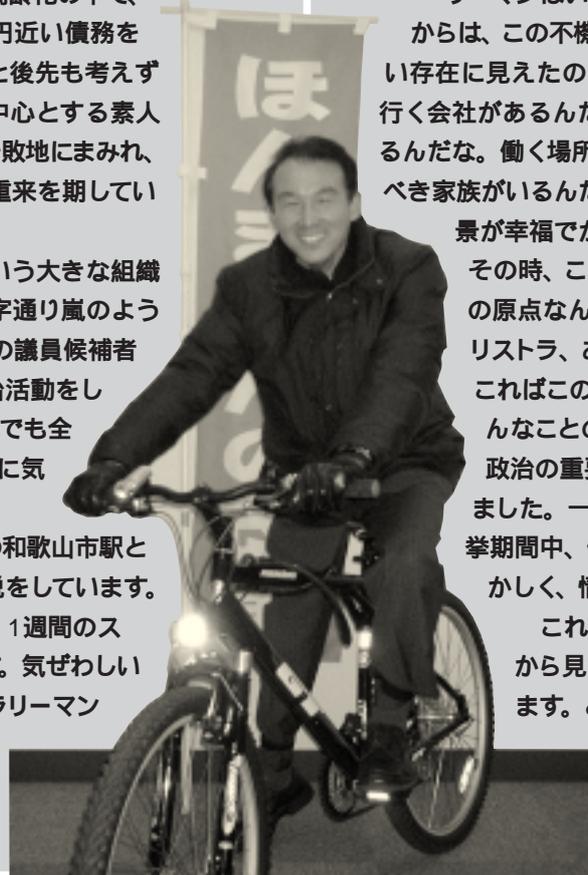
さるような方は、まずおられません。そもそも、選挙後に街頭演説をするような政治家が和歌山にはいなかったようで、ずいぶんと珍しがられました。通学の子高生たちが「あのオジサン、かわいそうね。まだ、演説をやってるよ。選挙終わったの知らないんじゃないの?!」なんて、話しながら通り過ぎることもありました。「オジサンも知ってるんだけど、演説やらせてね」とニコニコ応じます。なにしろ、3、4年経てば彼女たちも有権者ですから。

そんな朝の街頭演説をしていた時のことです。目の前にいる暗い顔をして通勤しているサラリーマンの皆さんが全く違って見えてきました。私も東京では、毎日通勤する側でした。朝は眠いし、二日酔いの時もあれば、仕事が順調でないときもあります。ニコニコ笑って出勤しているサラ

リーマンはいません。しかし、無職浪人の私の目からは、この不機嫌なサラリーマン集団が何とも羨ましい存在に見えたのです。「ああ、この人たちはいいな。行く会社があるんだな。会社に行けば、自分の机もあるんだな。働く場所があって、帰る家庭があって、守るべき家族がいるんだな」と思うと、その見慣れた通勤風景が幸福でかけがえのない景色に変わりました。

その時、この「当たり前の生活を守るのが政治の原点なんだ」と確信しました。会社の倒産やリストラ、あるいは大げさに言えば、戦争が起こればこのような幸福な生活は奪われます。そんなことのないように市民の生活を守るのが政治の重要な役割であると肌身に沁みて感じました。一方で、そんなことも分からずに、選挙期間中、偉そうな演説をしていた自分が恥ずかしく、情けなく思えました。

これからしばらく、落選中の候補者の目から見た日本の風景を連載させていただきます。どうかお付き合いください。



<http://www.shuhei-k.jp>
info@shuhei-k.jp